

「空知南部の在宅医療推進」の目的

由仁町立診療所 島田 啓志

バトンを渡していただいた山内純先生は、南幌町立病院が医師不足で厳しい時に、大変な思いをするのを知りながら、一人南幌に残ることを選んだ気骨のある先生です。誰しも、そのような選択はできないだろうと思います。私は、そのような山内先生から紹介していただけたことを光榮に感じております。

山内先生から紹介がありましたとおり、私の所属する由仁町立診療所では在宅医療に力をいれています。当院は2年前より在宅医療を始め、昨年には在宅療養支援診療所となり、来年度からは、「由仁だけでなく空知南部の在宅医療を推進する」と決意を新たにしています。

最近では2020年1月16日、空知南部4町対象の在宅療養推進フォーラムが栗山町で開催され、栗山町・長沼町・南幌町・由仁町を中心に数多くの参加がありました。そこで、「空知南部の在宅医療推進」と題してお話させていただきました。よろしければ下記QRコードをご覧ください。このような発表が許されるのも、開設者である由仁町の松村諭町長をはじめ、由仁町職員の理解・協力があってこそです。もちろん、医師の存在も忘れてはなりません。私が2018年に由仁で働き始めた時、常勤は小端順一所長一人でした。その後、縁あり栗山から久野和成先生が加わり常勤3名となり在宅医療の体制が強化されました。そして、今日も小端所長は定年にも関わらず、外来病棟、救急だけでなく特養配置医まで担い、第一線で活躍されています。現在、在宅医療は主に久野副所長と私で担当しておりますが、小端所長がいなくては診療所を空けて往診に出ることができません。そして、土日は当直支援の先生なくては、在宅医療の継続は困難です（当院は救急告示診療所でもあります）。由仁で働き、このように多くの支えがあり在宅医療が展開できていることを痛感しています。

かつての指導医から「本質的に鋭いものの照り返す光は鈍い」という言葉を教えていただきました。由仁に限らず、在宅医が診療を許されるのは、自院には自分以外の医師がおり、看護師が自律的にケアにあたり、自院以外に外来診療や専門医療を担う医療機関があり、そして、地域に介護・看護をはじめとするケアがあるからです。さらには、医療制度を支える国の経済力があるからです。「鈍い光」に意識を傾けることを怠ってはなりません。何一つ欠けても現状は崩れ得る、まさに現状は「綱渡り」の状況です。これから地域に人材はますます不足し、国家財政・自治体財政もますます厳しくなるでしょう。そのよ



年1度、大学時代の山仲間と登山することが心身のリフレッシュとなっています。今年は黒岳ロープウェイから黒岳石室テント泊し酒を飲み交わし、翌朝下山しました。軟派な山行ですが、日々の運動不足のためぎりぎりでした。その山仲間である倶知安厚生病院の濱本航先生にバトンを託しました。
【写真】桂月岳山頂から御来光を待つ濱本航氏(写真左)と島田(写真右): 2019/9/7撮影

うなこの国の縮図であるような当地域は「鈍い光の大切さ」を忘れないための絶好のフィールドです。

「人生の目的は金銭を得るに非ず、品性の完成に在り」と内村鑑三は残しました。その言葉は、一個人ではなく組織にも当てはまると思います。由仁町立診療所も、衰退の一途をたどりつつある地域社会に対して、医療機関としての品性の完成のためにどう振る舞うのか、常に問われ続けている存在であるというのが私の考えです。

これから当院は、空知南部全体での在宅医療推進に誠意、取り組んでまいります。残念ですが、これから人口が半減する中、いずれ各自自治体で現状の病床を維持するのは困難となる日が来るでしょう。その時に、その地域そのものが病床となりうる地域包括ケアの体制がその地域で構築されているかどうかで、地域住民の病院病床への意向は変わり得ると考えます。つまり、私たちの真の目的は在宅医療の推進ではなく地域包括ケアの充実です。

由仁町をはじめ空知南部の多くの医療機関は常時医師に欠員が生じている現状です。特に由仁は「都会に近い田舎」がキャッチフレーズです。札幌圏からも通勤可能です。私たちは在宅医療推進に理解のある常勤医師の方の着任を心待ちにしております。ご興味ある方、下記QRコードをご参照ください。

